



教育指導者が行う新人看護師と看護学生への学習支援の共通性と差異

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長野, 弥生, 細田, 泰子, 片山, 由加里, 土肥, 美子, 北島, 洋子, 根岸, まゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005645

研究報告

教育指導者が行う新人看護師と看護学生への 学習支援の共通性と差異

The Components of Commonalities and Differences in Learning Support for Novice Nurses and Nursing Students Conducted by Educational Instructors

長野弥生¹⁾・細田泰子²⁾・片山由加里³⁾・土肥美子⁴⁾・
北島洋子⁵⁾・根岸まゆみ⁶⁾

Yayoi Nagano, Yasuko Hosoda, Yukari Katayama, Yoshiko Doi,
Yoko Kitajima, Mayumi Negishi

キーワード：新人看護師，看護学生，教育指導者，学習支援

Keywords: novice nurse, nursing student, educational instructor, learning support

Abstract

The purpose of this study was to elucidate the components of commonalities and differences in learning support for novice nurses and nursing students conducted by educational instructors. We conducted an anonymous self-administered questionnaire survey by mailing it to 1,153 educational instructors (nurses who educate for novice nurses and nursing students) of 101 hospitals with 200 or more beds. Through an exploratory factor analysis of the data from educational instructors of novice nurses, 3 factors solutions were extracted: "Practice support", "Thinking support", and "Mental support". Concerning these factor structures, in the confirmatory factor analysis of the data from educational instructors of novice nurses and nursing students the goodness-of-fit-indicators showed acceptable levels and internal consistency was confirmed. Additionally, t-test for assessing learning support for novice nurses and nursing students revealed that novice nurses were higher than nursing students for all three factors.

要 旨

本研究は、教育指導者が行う新人と学生への学習支援について構成要素の共通性と差異を明らかにすることを目的とした。全国の200床以上の101施設の教育指導者（各部署で新人や学生の教育指導を行う看護職者）1,153名を対象に郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。学習支援に共通する構成要素の検討では、新人指導経験者のデータより探索的因子分析を実施し、＜実践支援＞、＜思考支援＞、＜精神支援＞の3因子15項目が抽出された。さらに、これらの因子構造を確認するために、新人指導経験者および学生指導経験者のデータでの確認的因子分析を行った結果、適合度指標は許容水準を示し、内的整合性が確認された。また、新人と学生への学習支援の差異を確認するために行ったt検定では、3因子ともに学生に比べて新人への学習支援の方が高かった。

受付日：2018年9月26日 受理日：2018年12月20日

1) 大阪府立大学大学院看護学研究科 博士後期課程

2) 大阪府立大学大学院看護学研究科

3) 同志社女子大学看護学部

4) 大阪医科大学看護学部

5) 奈良学園大学保健医療学部

6) 静岡県立大学看護学部

I. 緒言

2010年に新人看護師研修は努力義務化となり、2014年には「新人看護職員研修ガイドライン（改定版）」が作成され、新人看護師（以下、新人）の看護実践能力の向上が求められている。また、看護学生（以下、学生）においては、2011年の「大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会」の最終報告書にて、学生に必要とされる看護実践能力と卒業時到達目標が明確にされた。2017年には看護学教育の水準を維持向上させることを目的に、看護学教育モデル・コア・カリキュラムが策定され（文部科学省、2017）、看護基礎教育課程における教育の質の向上が求められている。このような背景から、新人や学生への教育を充実させ、両者への学習支援について検討していく必要がある。

学生や新人を指導する教育指導者は、熟達者として良いロールモデルである必要がある（文部科学省、2014；厚生労働省、2014）。近年の学習理論における指導方法では、学習者がその場に参加することから熟達者を観察し、携わり、発明または発見する機会を与えることが重要とされ（Colins, 2006）、教育指導者の役割が重視されている。そのため、役割を果たせるように、学生を担当する教育指導者には実習指導者講習会への参加が推奨されていたり、新人を担当する教育指導者には各医療施設で研修が設けられたりしており、教育指導者が学生や新人の学習を支援できるような体制が構築されている。

これまで、臨床における学生への学習支援では、支援内容（栗谷ら、2016）、指導上の困難（細田ら、2004）、役割モデルの認識と指導行動の関連（渡部ら、2013）などについて報告され、新人への学習支援では、困難に感じていることや役割（馬場ら、2016）について検討されてきた。従来は学生と新人を別にした支援方法が多く検討されてきたが、学生から新人への移行を踏まえ、両者への学習支援について検討する必要がある。この移行期に適切な支援を受けなかった場合に不満を感じることからも、両者への適切な支援が必要である（Kumaran & Carney, 2014）。近年では学生や新人について、臨床現場が求める能力と基礎教育課程における実際の能力に乖離が生じている（厚生労働省、2014）と言われ、乖離を埋めるための支援が必要とされている。このことから、両者への学習支援の構成要素の共通性を見出し、差異を把握することで、移行期にある学生と新人への適切な学習支援を検討することができ、乖離を埋め

るための方略を検討する資料になると考えた。

II. 目的

教育指導者が行う新人と学生への学習支援について構成要素の共通性と差異を明らかにする。

III. 用語の定義

本研究では、教育指導者を「医療施設の各部署で学生や新人の教育指導を行う看護職」とする。

IV. 研究方法

1. 対象者

全国の一般病床数200床以上の医療施設から無作為抽出し、看護管理責任者に調査への協力を文書で依頼した。各施設で新人や学生の教育指導を行う看護職者5～20名程度を選定してもらい、協力が得られた101施設の教育指導者1,153名を対象とした。

2. 調査方法

無記名自記式質問紙調査を実施した。調査への協力が得られた施設に、対象者に質問紙を配布することを依頼した。回収は対象者が質問紙への回答後、対象者自身で投函する郵送法を用いた。

3. 調査内容

1) 学習支援

文献（和住ら、2012；文部科学省、2014）をもとに、学習支援に関する25項目を抽出し、新人と学生それぞれへの指導経験の有無について回答を求めた。各項目の内容的妥当性は5名の看護教育学および看護管理学の研究者で検討し、項目の削除および修正を行った。「ある」と回答した場合には、文献をもとに作成した学習支援に関する25項目について、新人と学生に区分し、「1.全く当てはまらない」「2.あまり当てはまらない」「3.どちらとも言えない」「4.やや当てはまる」「5.とても当てはまる」の5段階で回答を求めた。得点が高いほど学習支援をしていると評価する。

2) 基本属性

性別、年齢、看護師経験年数、教育指導者経験年数、所属病棟について回答を求めた。

4. 分析方法

分析には統計ソフトIBM SPSS Statistics Ver.

22およびAmos Ver.22を使用し、有意水準は5%とした。新人と学生への学習支援の共通性を見出すために、まずは新人指導経験者のデータを用いて探索的因子分析により因子を抽出し、確認的因子分析で適合度を確認後、得られた結果をモデルとして学生指導経験者のデータを用いて確認的因子分析を行った。

1) 探索的因子分析

学習支援の項目分析は、記述統計量を算出した。新人指導経験者のデータを用いて探索的因子分析を実施した。項目が因子分析に適しているか、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度およびBartlettの球面性検定より判断した。因子抽出の方法は最尤法、プロマックス回転とした。因子負荷量は.4を基準として分析を行った。

2) 確認的因子分析

探索的因子分析で抽出された因子を潜在変数として2次因子分析モデルを作成し、新人指導経験者および学生指導経験者のデータを用いて確認的因子分析を行った。モデルの適合度指標には、GFI (Goodness-of-Fit Index), AGFI (Adjusted Goodness-of-Fit Index), CFI (Comparative Fit index), RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) を用いた。

3) 内的整合性

内的整合性の確認ではCronbach's α 係数を算出した。

4) 各因子に含まれる合計得点の比較

抽出された因子別に合計得点、平均値、標準偏差を算出し、約95%が平均値 $\pm$ 2SD以内にあることを確認し、新人指導と学生指導の両方を経験している教育指導者のデータを用いて対応のあるt検定により新人への学習支援および学生への学習支援について比較検討を行った。

5. 倫理的配慮

本研究は、大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会の承認を得て実施した（申請番号：29-38）。対象者には、研究の目的、方法、研究への協力は自由意思であること、データは研究以外の目的に使用しないこと、個人情報の保護、データの取り扱いおよび研究結果の公表等について文書にて説明した。回答は無記名とし、個別投函による調査票の返送をもって研究参加への同意を得たこととした。

V. 結果

1) 質問紙の配布・回収状況

質問紙は、教育指導者1,153名に配布し、664名（回収率57.6%）から回答を得られ、有効回答数は621名（有効回答率53.9%）であった。そのうち、新人指導経験者は612名、学生指導経験者は550名、新人と学生両方の指導経験者は541名であった。

2) 対象者の基本属性

対象者の性別は、女性574名（92.4%）、男性47名（7.6%）年齢は、20歳代が47名（7.6%）、30歳代が212名（34.1%）、40歳代が267名（43.0%）、50歳代が93名（15.0%）、無回答が2名（0.3%）であった。看護職としての平均経験年数は $18.0 \pm SD7.8$ 年、新人への平均指導経験年数は $6.8 \pm SD6.3$ 年、学生への平均指導経験年数は $6.4 \pm SD6.4$ 年であった。就業場所は、成人（内科系）病棟が115名（18.5%）、成人（外科系）病棟が115名（18.5%）、成人（混合）病棟が115名（18.5%）、小児科病棟（成人との混合含む）が52名（8.4%）、産科病棟（他科との混合含む）が36名（5.8%）、集中治療室系が32名（5.2%）、地域包括ケア病棟が21名（3.4%）、外来が20名（3.2%）、手術室が19名（3.1%）、精神科病棟が17名（2.7%）、回復期リハビリ病棟が15名（2.4%）、重症心身障害児（者）病棟が12名（1.9%）、神経難病系病棟が10名（1.6%）、その他が42名（6.8%）であった（表1）。

表1 対象者の基本属性

項目	n	(%)
性別		
男性	47	7.6
女性	574	92.4
年齢		
20歳代	47	7.6
30歳代	212	34.1
40歳代	267	43.0
50歳代	93	15.0
無回答	2	0.3
就業部署		
成人（内科系）病棟	115	18.5
成人（外科系）病棟	115	18.5
成人（混合）病棟	115	18.5
小児科病棟（成人との混合含む）	52	8.4
産科病棟（他科との混合含む）	36	5.8
集中治療室系	32	5.2
地域包括ケア病棟	3.4	21
外来	20	3.2
手術室	19	3.1
精神科病棟	17	2.7
回復期リハビリ病棟	15	2.4
重症心身障害児（者）病棟	12	1.9
神経難病系病棟	10	1.6
その他	42	6.8
平均看護師経験年数（Mean $\pm$ SD）	18.0 $\pm$ 7.8	
新人への平均教育指導者経験年数（Mean $\pm$ SD）	6.8 $\pm$ 6.3	
学生への平均教育指導者経験年数（Mean $\pm$ SD）	6.4 $\pm$ 6.4	

3) 新人への学習支援の構成要素の抽出

(1) 項目分析

天井効果・フロア効果を示す学習支援の項目は認められなかった。失度・歪度が±1以上を示す1項目は削除した。

(2) 新人への学習支援の探索的因子分析

新人指導経験者のデータを用いて探索的因子分析を行った。因子数の決定では、スクリー基準を用い、因子数を3因子とした。Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は.943を示し、Bartlettの球面性検定では有意差を認めた ($P<.001$)。因子負荷量が.4未満を示した項目および複数の因子で.4以上を示した9項目を削除し、15項目からなる3因子が抽出された(表2)。

第1因子は「学習者が看護の役割を理解できるように支援している」、「学習者の知識を看護実践に結びつけられるように関わっている」、「学習者が倫理的行動をとれるように支援している」、「学習者がチーム医療を理解できるように支援してい

る」、「学習者が優先順位を考えて行動できるように支援している」、「学習者の教育に関心をもって関わっている」、「学習者が安全安楽な看護技術を実践できるように支援している」の7項目から構成され、実践的な支援をしている内容であることから<実践支援>と命名した。第2因子は「学習者が問題解決に取り組めるように支援している」、「学習者の臨床判断を促す支援をしている」、「学習者の学習状況をスタッフが理解できるように関わっている」、「学習者が現象を解釈できるように支援している」の4項目から構成され、学習者の思考を支援している内容であることから<思考支援>と命名した。第3因子は「学習者が声をかけやすいような雰囲気作りをしている」、「学習者への指導の際、感情をコントロールして関わっている」、「学習者の考えや行動を承認するように関わっている」、「学習者の精神面へのサポートができるように関わっている」の4項目から構成され、学習者の精神的な支援をしている内容であることから<精神支援>と命名した。

表2 新人への学習支援の探索的因子分析の結果

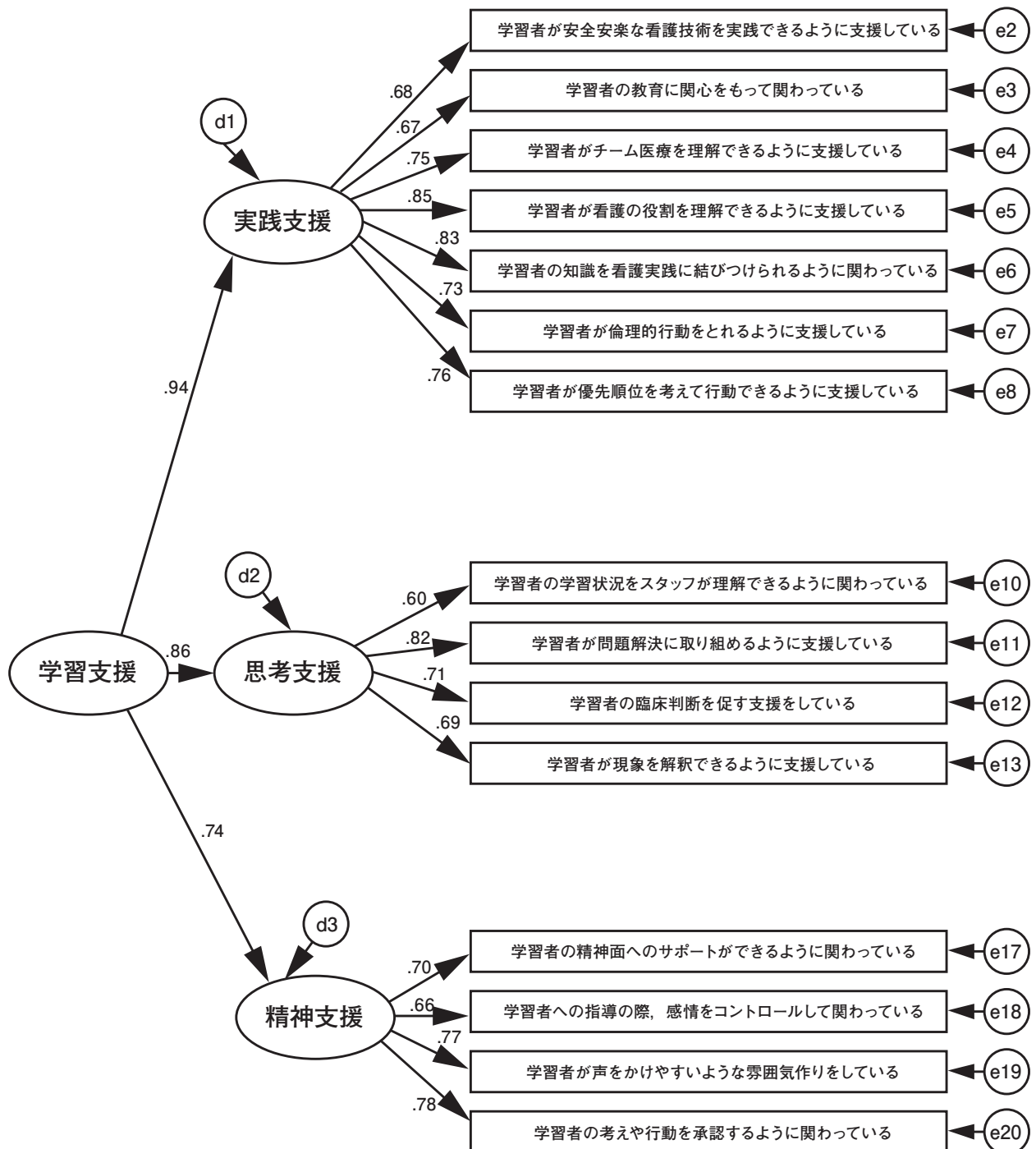
n=612				
	因子負荷量			
	第1因子	第2因子	第3因子	
1. 実践支援 ($\alpha = .898$)				
学習者が看護の役割を理解できるように支援している	.866	-.017	.006	
学習者の知識を看護実践に結びつけられるように関わっている	.855	.018	-.050	
学習者が倫理的行動を取れるように支援している	.778	-.036	-.022	
学習者がチーム医療を理解できるように支援している	.735	-.009	.042	
学習者が優先順位を考えて行動できるように支援している	.658	.133	-.016	
学習者の教育に関心をもって関わっている	.475	.104	.160	
学習者が安全安楽な看護技術を実践できるように支援している	.471	.165	.108	
2. 思考支援 ($\alpha = .792$)				
学習者が問題解決に取り組めるように支援している	.008	.858	-.036	
学習者の臨床判断を促す支援をしている	.066	.737	-.114	
学習者の学習状況をスタッフが理解できるように関わっている	-.018	.578	.066	
学習者が現象を解釈できるように支援している	.236	.477	.004	
3. 精神支援 ($\alpha = .813$)				
学習者が声をかけやすいような雰囲気作りをしている	-.090	-.065	.942	
学習者への指導の際、感情をコントロールして関わっている	.075	-.093	.679	
学習者の考えや行動を承認するように関わっている	.125	.05	.639	
学習者の精神面へのサポートができるように関わっている	-.009	.353	.455	
15項目全体 ($\alpha = .948$)				
	固有値	7.267	1.367	.987
因子間相関行列				
第1因子	1.00			
第2因子	.755	1.00		
第3因子	.620	.577	1.00	

因子抽出法:最尤法、回転法:プロマックス回転

4) 新人と学生への学習支援の構成要素の確認

新人指導経験者のデータを用いて、探索的因子分析で抽出された＜実践支援＞、＜思考支援＞、＜精神支援＞の3因子を潜在変数とし、2次因子を《学習支援》とするモデルで確認的因子分析を行った結果、適合度指標はGFI=.945, AGFI=.925, CFI=.962, RMSEA=.058を示した(図1)。

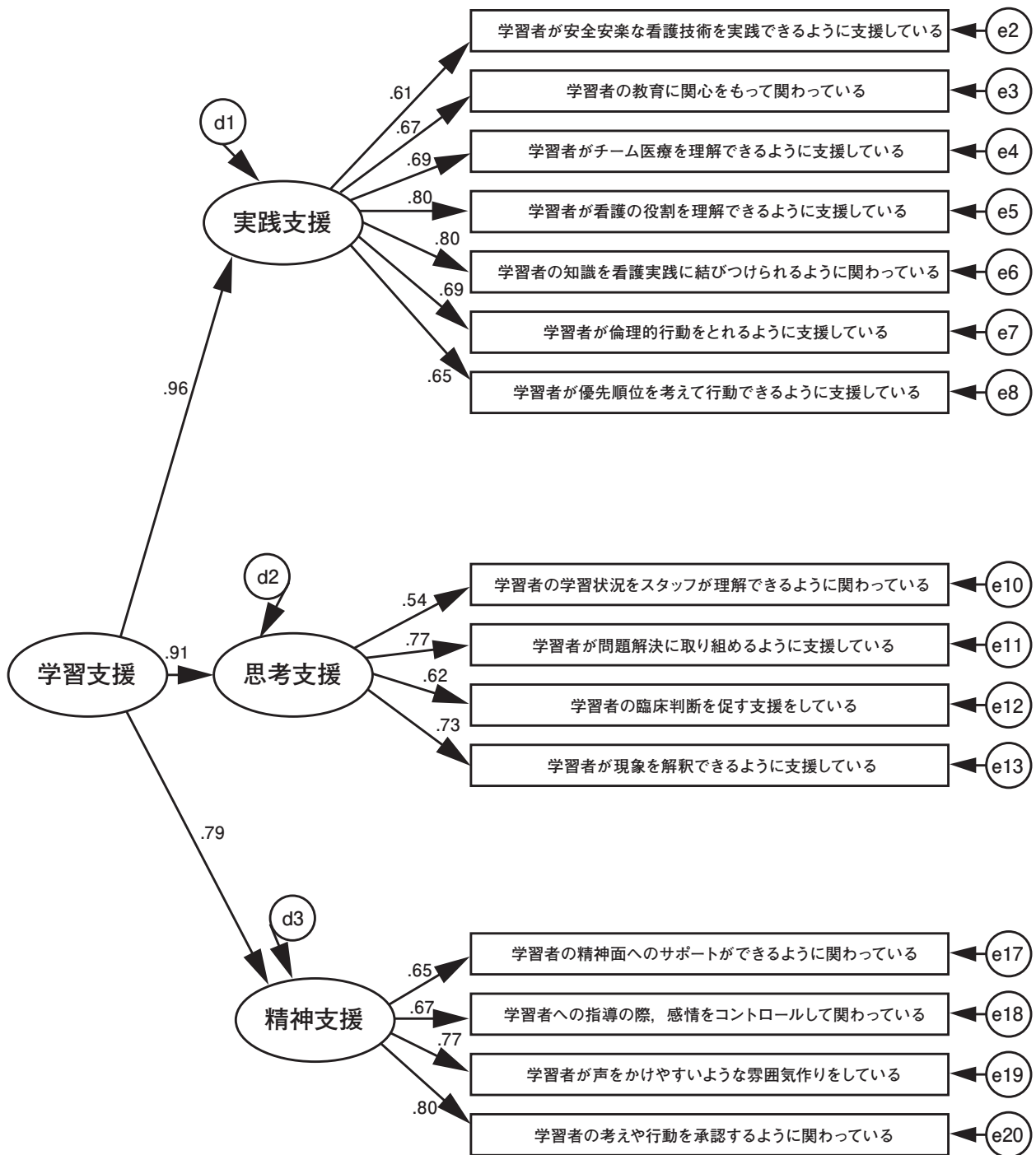
同じモデルを学生指導経験者のデータに用いた結果、適合度指標はGFI=.919, AGFI=.889, CFI=.933, RMSEA=.072であった(図2)。



n=612 数値は標準化推定値

モデル適合度：GFI=.945, AGFI=.925, CFI=.962, RMSEA=.058

図1 新人への学習支援の確認的因子分析の結果



n=550 数値は標準化推定値

モデル適合度：GFI=.919, AGFI=.889, CFI=.933, RMSEA=.072

図2 学生への学習支援の確認的因子分析の結果

5) 信頼性の検討

各因子のCronbach's α 係数は、新人への学習支援では第1因子が $\alpha = .898$ 、第2因子が $\alpha = .792$ 、第3因子が $\alpha = .813$ 、全体では $.921$ であった。

学生への学習支援では第1因子が $\alpha = .867$ 、第2因子が $\alpha = .757$ 、第3因子が $\alpha = .798$ 、全体では $\alpha = .889$ であった。

6) 新人および学生への学習支援の各因子の得点比較

新人への学習支援の平均値±標準偏差は、＜実践支援＞は 30.8 ± 3.5 、＜思考支援＞は 17.1 ± 2.1 、＜精神支援＞は 17.4 ± 2.2 、全体では 65.3 ± 6.7 であった。学生への学習支援では、＜実践支援＞は 28.9 ± 4.0 、＜思考支援＞は 15.6 ± 2.4 、＜精神支援＞は 16.7 ± 2.4 、全体では 61.2 ± 7.8 であった。また、新人および学生それぞれの＜実践支援＞、＜思考支援＞、＜精神支援＞について対応のあるt検定を実施したところ、各3因子いずれも学生よりも新人の方が高かった ($P < .001$)。 (表3)

表3 新人および学生への学習支援の各因子の得点比較

(n = 541)

	新人	学生	
	平均±標準偏差	平均±標準偏差	P値
＜実践支援＞	30.8 ± 3.5	28.9 ± 4.0	$P < .001$
＜思考支援＞	17.1 ± 2.1	15.6 ± 2.4	$P < .001$
＜精神支援＞	17.4 ± 2.2	16.7 ± 2.4	$P < .001$
全体	65.3 ± 6.7	61.2 ± 7.8	$P < .001$

対応のあるt検定

VI. 考察

本調査の目的は、教育指導者が行う新人と学生への学習支援について構成要素の共通性と差異を明らかにすることであった。以下に、共通性と差異についてそれぞれ考察する。

1. 教育指導者が行う新人と学生への学習支援の共通性

教育指導者が行う新人への学習支援について探索的因子分析を行った結果、＜実践支援＞、＜思考支援＞、＜精神支援＞の3因子15項目が抽出された。これらの因子は、看護基礎教育課程にも必要とされるものであり (文部科学省, 2014)、学生への学習支援にも適用可能と考えられたため、探索的因子分析で見出された3因子を潜在変数として2次因子分析モデルを作成し、新人指導経験者および学生指導経験者のデータを用いて確認的因子分析を行った。モデルの適合度指標のGFI, AGFI, CFIは、1に近いほど適合が良い

と判断され、RMSEAは.8以下であれば良好と判断される (対馬, 2016)。これらの基準より、本モデルの適合度指標は許容水準にあり、各因子のCronbach's α 係数は、新人および学生ともに許容水準を満たす (DeVellis, 2017)ことから、内的整合性が確認された。

＜実践支援＞は、新人や学生が臨床での実践的な学びを支援するような項目であった。実践力を育成するためには、実践と思考を連動させながら学ぶことができるようにする必要がある (厚生労働省, 2011)。「学習者の知識を看護実践に結びつけられるように関わっている」、「学習者が倫理的行動をとれるように支援している」、「学習者が優先順位を考えて行動できるように支援している」、「学習者が安全安楽な看護技術を実践できるように支援している」ことは、特に実際に患者を担当することで学びを深められる項目であると考えられ、実践しながら既習の知識をもとに指導していると考えられる。さらに、看護師の役割を教育するには経験から得た実践知を教える必要があることから (Benner, 1996/2015)、教育指導者は、知識と実践を統合させながら看護の役割を教育していると推察される。これらの支援をするには、「学習者の教育に関心をもって関わっている」ことが重要であり、教育に関心を持っていることが＜実践支援＞につながっていると考えられる。

＜思考支援＞は、新人や学生が思考し患者理解を深めるための学習を支援する内容であった。「学習者が問題解決に取り組めるように支援している」、「学習者の臨床判断を促す支援をしている」、「学習者が現象を解釈できるように支援している」ことは、新人や学生が目の前で起こっている出来事を理解し、臨床的な思考ができるように支援していると考えられる。Tanner (2006)は初心者が看護師のように考えることができるよう、臨床判断モデルを構築し、シミュレーションで活用することで、臨床判断の育成に取り組んでおり、新人と学生にも臨床判断能力は必要とされている。また、「学習者の学習状況をスタッフが理解できるように関わっている」ことは、スタッフの思考を支援している項目である。学習者の学習状況をスタッフが理解することで、一人で教育するのではなく、スタッフ全員で教育することを可能にしていると推察される。

＜精神支援＞は、新人や学生が萎縮せずに学習できるよう支援する内容であった。新人の離職理由には、看護実践力の不足や精神的落ち込みがあることから (片桐ら, 2016)、「学習者の精神面へ

のサポートができるように関わっている」ことで精神的落ち込みへの支援をしている。また、学生への非効果的な関わりの一つには、学生を萎縮させる関わりや不誠実な態度などがある（山田ら、2011）。新人や学生に「学習者が声をかけやすいような雰囲気作りをしている」、「学習者への指導の際、感情をコントロールして関わっている」、「学習者の考えや行動を承認するように関わっている」ことで新人や学生が好感を持てる教育的な関わりを心がけていると考えられる。

2. 教育指導者が行う新人と学生への学習支援の差異

新人および学生それぞれの＜実践支援＞、＜思考支援＞、＜精神支援＞を比較したところ、3因子すべてにおいて有意差が見られた。新人への学習支援と学生への学習支援で有意な差があったことは、教育指導者は新人と学生のそれぞれが学習できるレベルを判断し、学習環境や学習状況に応じた支援をしているとも考えられる。教育指導者は、新人や学生の学習を支援するために、学習者への動機づけや、学習ニーズの把握、学習者の特徴に関して学習ニーズを持っている（土肥ら、2015）ことから、学習者の特徴や状況を理解したうえで、それぞれに応じた支援をしていると考える。

正統的周辺参加論では、新参者は実践共同体の周辺から参加し、徐々に中心に向かっていくとされている（Lave, et al., 1991/1993）。中心に向かうほど求められることは多くなることが予想され、学生から新人への移行期にあることから新人に求められることは高まっていると推察される。最近では患者の病態の複雑化や入院期間の短縮などから、新人を手厚く指導せざるを得ない状況にもあると考える。新人指導に携わる看護師の9割以上が新人教育に責任を感じており、責任の重さを感じるほど役割遂行も高くなることから（中澤ら、2018）、新人教育指導者は熱心に新人を指導していると言える。

学生においては在院日数の短縮化や短期間の臨床実習により、学生が十分に学習することが難しい現状がある（厚生労働省、2011）。今後は、学生の特徴や状況を理解しながら、教育指導者および教員、または実習施設と大学がさらに連携し、短期間であっても十分に学習できる環境を確保し、学習を支援していくことが必要である。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究は、確認的因子分析の結果にもとづき、新人への学習支援の構成要素を学生に適用しているため、今後は学生への学習支援の妥当性をさらに検討する必要がある。因子分析では、因子負荷量の基準から脱落した項目について、学習支援との関連を検討し、新人および学生への学習支援について探求する必要がある。

VIII. 結論

1. 新人および学生への共通の学習支援の構成要素は、＜実践支援＞、＜思考支援＞、＜精神支援＞の3因子15項目が抽出され、信頼性は許容水準であった。
2. 教育指導者が行う新人と学生への学習支援の差異は、＜実践支援＞、＜思考支援＞、＜精神支援＞の3因子すべてにおいて有意差が認められ、新人への学習支援の方が高かった。

謝辞

本調査に快くご協力くださいました教育指導者の皆様、病院関係者の皆様に深く御礼申し上げます。本研究はJSPS科研費JP16K11953の助成を受けたものです。

文献

- Benner, P., Tanner, C., Chesla, C. (1996) : Expertise in Nursing Practice : Caring, Clinical Judgment and Ethics. Springer Publishing Company, New York.
- ／早野 ZITO 真佐子 (2015) : ベナー 看護実践における専門性—達人になるための思考と行動。医学書院、東京。
- 馬場さゆり、窪田好恵、伊丹君和 (2016) : 新人看護職員をサポートするプリセプター支援者または教育担当者に関する研究の文献検討。人間看護学研究, (14), 17-2.
- Colins, A. (2006) : Cognitive Apprenticeship. In, R. K. Sawyer (Ed), The Cambridge Handbook of the Learning Sciences. 49-51. Cambridge University Press, New York.
- DeVellis, R. F. (2017) : Scale Development: Theory and Applications (4th edition). SAGE Publications, Thousand Oaks, CA.
- 土肥美子、細田泰子、中橋苗代ら (2015) : 臨床における教育指導者の学習環境デザインに関する学習ニーズとその学習方法の検討。大阪府立大学看護学部紀要, 21, 1-11.
- 細田泰子、山口明子 (2004) : 実習指導者の看護学実習に

- おける指導上の困難とその関連要因. 日本看護研究学会雑誌, 27(2), 67-75.
- 片桐麻希, 坂江千寿子 (2016): 新卒看護師の離職理由と就業継続に必要なとされる支援内容に関する文献検討. 佐久大学看護研究雑誌, 8(1), 49-59.
- 厚生労働省 (2011): 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書, 2018年6月22日, <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000013l6y-att/2r98520000013l6h.pdf>
- 厚生労働省 (2014): 新人看護職員研修ガイドライン, 2018年6月21日, http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000049466_1.pdf
- Kumaran, S., Carney, M. (2014): Role transition from student nurse to staff nurse: Facilitating the transition period. *Nurse Education in Practice*, 14(6), 605-611.
- 栗谷亜紀, 難波浩子, 岡本恵里 (2016): 看護学実習における看護師としての指導行動に対する自己評価および実習受け入れに対する捉え方. 三重県立看護大学紀要, 19, 31-41.
- Lave, J., Wenger, E. (1991): *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press, New York: 佐伯胖 (1993): 状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加. 産業図書, 東京.
- 文部科学省 (2011): 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告, 2018年6月21日, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm
- 文部科学省 (2014): 臨地実習指導体制と新卒者の支援, 2018年6月21日, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm
- 文部科学省 (2017): 看護学教育モデル・コア・カリキュラム, 2018年6月21日, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf
- 中澤沙織, 富田幸江, 鈴木英子 (2018): 新人看護師の実地指導を行う看護師の役割遂行とその関連要因. 埼玉医科大学看護学科紀要, 11(1), 11-20.
- Tanner, A. C. (2006): Thinking like a nurse: A research-based model of clinical judgment in nursing. *Journal of Nursing Education*, 45(6): 204-211.
- 対馬栄輝 (2016): SPSSで学ぶ医療系データ解析. 第2版, 東京図書, 東京.
- 渡部菜穂子, 一戸とも子 (2013): 臨地実習指導者の「役割モデル」の認識と指導行動との関連. 弘前学院大学看護紀要, 8, 11-23.
- 和住淑子, 黒田久美子, 白川秀子ら (2012): 新人看護師教育担当者育成モデルプログラムの開発と試行. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 34, 45-50.
- 山田知子, 堀井直子, 混同暁子ら (2011): 看護学生の認知する臨地実習での効果的・非効果的な指導者の関わり. 中部大学生命健康科学研究所紀要, 7, 13-23.